View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Waseda University Repository

博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	北田　綾
論　文　題　目	ラオス南部の織物に関する文化人類学的研究 －織物の村、サパーイ村における民族誌的事例研究－

審査要旨

本論文は、北田　綾氏が過去15年以上にわたって続けてきたラオス南部の織物に関する研究の集大成である。北田氏は色彩感覚に卓抜した才能を持ち、それを文化人類学研究の中で開花させた。論文の主題は今までほとんど研究が行われてこなかった、ラオス南部の織物の伝統的色合い、模様、織り方の技術がどのように伝承されてきたのかを問うものである。織物の色彩が個人的資質により伝承されてゆくものなのか、それとも織子が所属するコミュニティで学習され共有されて伝承されてゆくのか、という仮説を検証するため、チャンパサック県のサパーイ村に住み込み、織物の指導者の家庭で自ら織物を学びながら、そこで暮らす織子の日常生活を記録してきた。結論として、この地で見られる独特の色彩認識と模様デザインの伝承は、妻方の親族組織に基づいた日常のコミュニケーションの中で伝えられてゆくことを明らかにした。論文の最後では、外国で織物の意匠が簡単にコピーされ、安価な値段でマーケットで売られている実態を指摘しており文化的伝統の維持の難しい点にも触れる意欲的な研究といえる。

論文は全 7 章で構成されている。第 1 章から第 3 章にかけて、導入部として、ラオスの織物の歴史的背景についてふれている。特に第 1 章では、ラオスにおける織物の社会的重要性について歴史的経緯をたどりながら論述している。第 2 章では、フィールドワークに基づいたチャンパサック県のサパーイ村、ドンコー村の経済活動全般について述べている。ここで注目すべき点は、筆者がこれらの村に近い都市、パクセーのマーケットで売買されている織物の調査を含んでいる点である。近年安い外国産の織物に押され、マーケットでの売り上げが落ち込む中、そうしたグローバリゼーションの荒波にもめげず、自らの織物を見直し、安い外国産の織物に対抗してゆこうという力強さも村の織り手にみられることは、筆者が述べているように、織物が単に経済的な意味だけを持っているのではなく、社会－生活全般にわたって特別な象徴的意味を持つものであったことを示唆するもので、今後織物の研究の方向性を考えさせる調査結果となっている。

第 3 章、第 4 章で、そうした生活に根差した織物を考えるうえで必要な織り手の家族－親族組織、さらに、織物に関わる人々の個人的アイデンティティの問題と、広範でかつ深い考察がなされている。筆者は織り手の社会が妻方居住、妻方の家族や敷地共有集団の中で生まれ育ち、その中で織物の技術、知識、デザインが伝承されてゆくことに言及している。すなわち比較的小さな閉鎖的集団の中で伝達されてゆくという。結果的に、織物の文様など独自性を維持しやすく、それがこの村の織り手の自信や誇りにつながっている様子を述べている。第5章では、数値測定を含む精密な織物の色彩分析、また文様の分類の結果が述べられている。そこから、地域の織り手は、西洋など、他地域とは大いに違った色彩感覚をもち、また文様の取り方も身近なものを取り入れ具象化してゆく様子が述べられている。後に、審査員からの指摘のように、その感覚が、北田氏という外部の調査者の研究上の概念として、すなわちエティック的に示されたのか、あるいは、織り手の考えに基づくエミック的な分析が行われたのかについては、もう少し明確にしておく必要があるように思わるが、細かい文様分類と、色彩感覚を明らかにしたことは、後に続く研究者にとって、検証可能な意義のある結果を導き出したといえる。

公開審査会は、委員全員集まり、活発な質疑応答がなされた。冒頭、北田氏から、論文の趣旨説明があり、委員全員で論文の要点を確認した。その後、委員全員から質疑が出され、それに北田氏が回答を出すという形で進められた。委員全員からは、長年にわたる忍耐強いフィールド調査に対するねぎらいと、長期にわたるフィールド調査を論文という形でまとめて、最終的に結果を出したことに対する称賛が寄せられた。

一方で、いくつか疑問点、問題点も指摘された。それらは以下のように要約される。

氏名　北田　綾

人口動態について言及している箇所で、ドンコー村とサパーイ村の違いが大きすぎるが、その理由について説明がなされていない；

伝統について語っている部分があるが、それは村人自身がそのように語っているのか。同様に、文様、デザインについて説明している部分で、村人自身がそのように説明しているのか、筆者がそう言っているのかはっきりさせておく必要がある；

色彩分析について、西洋的な感覚と、ラオスの織り手の感覚の違いが良く説明されており興味深いが、その際、コンクリンの色彩基準なども参考にすべきではなかったか；

織物を文章としてのテキストとして見られる可能性を示している。すなわち、人々の生活そのものを反映させるものとして見られるのではないか。その意味で、文様の分類について、精緻な分類を行っているが、それは機械的なものにすぎず、もう少し踏み込んで、そこから織り手、あるいは織り手の所属する村の人々の宇宙観、世界観について言及されると、論文はもっと生き生きとしたものになるのではないか；

各章の一部がすでに発表した論文を基にしていることは、それらに対してすでに一定の評価がなされたということであるが、同時にそれらを寄せ集めた感が論文にある。もう少し、論文全体をならして論文としてまとまりのあるものにしてゆく必要があるのではないか。

これに対して、北田氏の回答は以下の通りであった。

ドンコー村とサパーイの人口動態の違いについて、自分も調べてみたが、原因はわからなかった；

伝統について、確かに筆者の言葉で論文は書いているが、村人自身も同様に認識していると考える。またデザインの説明については、むしろ村人の言葉に従っている；

色彩についてコンクリンの分類は確認しているが、論文では触れなかった。もう少し精密に読んでゆきたい；

織り手の宇宙観、世界観は大変関心がある。今後調査を続けてその点も探ってゆきたい。

以上、いくつかの問題点は見られ、さらにこれからのフィールド調査を通して確認してゆかなければならない点も多いと思われるが、北田氏自身が述べているように、ラオスの織物についての研究が少ないこと、特にラオス南部についてはほとんど研究が見られないこと、さらに人類学的視点からの研究は皆無であることを考えると、本研究は今後、多くの研究者に引用され、さらには後に続く研究のモデルになるものと考えられる。評決の結果、審査員は全員一致して、本論文は博士学位授与に値するものとした。

公開審査会開催日	2019 年　12　月　21　日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	西村　正雄	文化人類学、東南アジア地域研究	博士（ミシガン大学）
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	松前　もゆる	文化人類学、ヨーロッパ移民研究	博士（東京大学）
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	小沼　純一	音楽・芸術批評	